

今日におけるワイルドの美的世界

堀江珠喜

(園田学園女子大学助教授)

ロンドン、ダブリンにわずか2週間あまりの滞在とはいえ、その気になればずいぶんワイルドの世界に触れることができる。それが今回の旅の感想だ。もっともアカデミックというよりは、ジャーナリスティックな、あるいはいわゆる「ミーハー的」なレベルでの好奇心によるものであることは否めないが、ともかく数年前に『ワイルドの時代』で書いた事柄の確認や、訂正、補足の意味もあって、これらの都市を歩き回る。ひたすらワイルドの影を求めて。

最初に訪れたのはサヴォイ・ホテルである。二泊してワイルドの“beyond my means”の気分を味わいながら、広報部へ押しかけた。ワイルドが滞在していた記録等がないかと思っただが、期待はずれ。資料調査係がくれたのは、1893年3月ワイルドにあてた請求書のコピーのそのまたコピーである。この時期にあのボジーあての手紙“Your letter was delightful, red and yellow wine to me”が書かれたのだが、サザビーの競売でサヴォイはこの請求書をせり落とせなかった。真赤なサロメ・カクテルを一階のバーで見つけたことが、せめてものなぐさめだ。

サヴォイとは対照的に、カドガン・ホテルは、ワイルドが常連であったことをセールスポイントにしている。パンフレットに「逮捕された」とは書かれていないが、それ以前にもよく利用していたのである。タイト・ストリートに近く、また建物の後部が憧れの女性、リリー・ラングトリーのかつての住居であり、ホテルに売却後もここを常宿としていたためであろう。

このホテルのレストランには彼女の名がついているし、日曜日のメニューにはワイルドのアフォリズムがちりばめられている。もちろん彼らの写真は、あちこちに飾ってある。ワイルドが使った部屋に泊まることも可能だ。

ロンドンで、ワイルドゆかりのレストランといえば、カフェ・ロワイヤルとケトナズである。改築・改装をしているが、二店とも現存している。前者のバー入口には、ワイルドの首の彫刻が飾られ(1856-1900)となっていたので翌日、支配人に1854の間違いだと言き送った。もし機会があったら訂正の確認をしていただきたい。また上階の踊り場にワイルドの写真がいくつも飾られ、パンフレットの広告文に彼の名が使われている。以前はメニューにも書いてあったのだが。

ケトナズには全くワイルドに関連する物は見当たらないが、二階に個室がある。きつとテイラー達を招いたのも、こんなところだったのだろう。ごく普通のイタリア料理店だ。

それにしても『真面目が肝心』を観る機会を得たのは幸運だった。しかもすべて男性による、その名も Ernest Productions なる素人劇団で、利益は AIDS 基金に寄付されるというもの。観客の大部分は、同性愛者らしい男性である。

座長演じるブラックネル卿夫人は迫力満点であり、この役は男性に向いていると思われた。ジャックとアルジェノン、ジャックとメリマンのあいだが、「あやしい」という解釈も面白い。この劇は、演出次第でさまざまな可能性が発揮できると改めて感心した。

ダブリンではピーコック座で、ユーリック・オコーナー作 *A Trinity of Two* がかかっていた。これはトリニティ・カレッジの同級生であるワイルドとカーソンが、クイーンズベリ裁判で対決するという皮肉な運命をテーマにしている。ワイルドの有名なアフォリズムが楽しめる一方、重苦しい裁判の場面が再現される。元弁護士でナショナリストのオコーナー氏らしい作品だ。後日この作者をお訪ねしたのだが、書斎の机の上にワイルドの警句集を見つけたとき、なんとなくおかしかった。

この芝居では、敗訴したときワイルドがバリーに逃げなかったのを、母親の「Irish Gentleman であれ」という言葉に従ったものと解釈している。またカーソンが、トリニティ時代から家柄と成績の良いワイルドに、コンプレックスを抱いていたという見方も面白い。

さてオスカリアンの最も興味をそそられるのが、タイト・ストリートやメリオン・スクエアの建物であろう。今では各階、居住者が異なり、ワイルドの時代の面影があまりないのは残念だが、その一部に入り写真をとらせてもらった。筋骨たくましい男性なら警戒されただろうが、これも小柄な東洋の女の特権か。しかし誰かが記録しておくべき資料だと思う。

ロンドンでお会いした1890年代協会の Krishnamurti 博士は、「ワイルドだけが世紀末ではない」と優しく論してくださったが、やはり私にとってはワイルドの時代に他ならない。コマーシャルイズム、ジャーナリズムのレベルで扱われるため、アカデミズムから敬遠されがちな「ワイルド」である。が、それがまたワイルドらしさであることを認識した上で、今後の研究、協会のあり方を考えるべきであろう。

Ut pictura poesis.

吉田正俊

(共立女子大学名誉教授)

「詩も絵のように」ホラチウスの名文句で始めるきざな術学趣味は、私の長所です。シ